
うさぎ、うそ、うさぎ

u n i c o r n

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

うさぎ、うそ、うさぎ

【Nコード】

N4216A

【作者名】

unicorn

【あらすじ】

夜中に叩き起こされた隼人。幼馴染の陽菜はフラれる度に隼人の所へと来ていた。真っ赤に目を腫らしたウサギに今夜も隼人は嘘をつく。

うさぎ、うそ、うさぎ

「とりあえず鼻水拭けよ」

そう言っつて隼人は目の前で目を腫らす女に、ティッシュ箱を差し出した。

溢れる涙を拭いもせず、声を漏らす女は、隼人の幼馴染の松浦陽菜だ。陽菜は何も言わずに、箱を受け取り、そしてまた涙を零す。隼人は、相変わらずの陽菜の様子を見て、大きなため息を吐いた。

この発端はつい何時間か前のこと。心地よい眠りに入った隼人を妨げたのは、他でもない陽菜だった。

一向に話そうとしない陽菜を見かね、隼人はキッチンに向かった。そして、冷蔵庫からミルクを取り出し、コンロに火をつける。

「ねえ、今めんどくさい女だっつて思ったでしょ」

キッチンに立つ隼人の背中に向かって、陽菜は声を荒げる。

「思っつてねえよ」

「いや、絶対思った！だっつて顔に出てたもん、めんどくさいっつて」

隼人は今日で2回目のため息を吐いた。面倒だと思っつたなら、彼はとっくに彼女を部屋から追い出していただろう。

彼女が現れたとき、時計の針はすでに夜中の1時を指していた。突然夜中に叩き起こされ、その上、いきなり泣き出すのだから、ま

るで始末に負えない。それでも、隼人は陽菜を追い返そうとはしなかった。どうして追い返さないのか。どうして面倒なことに付き合っているのか。全くと言っていい程、その理由を気付かない陽菜に、少しくらい嫌な顔をしたって罰は当たらないはずだ。

「結局、何があっただよ」

苛立つ気持ちを抑え、隼人はできるだけ冷静に話しかけた。

「ふられた」

陽菜は一言だけ言うと隼人のベッドに座りこんだ。ベッドは陽菜の重みを受け止め、ぎしぎしと音を立てた。

「お前さあ、毎回毎回フラレるたびに、俺んどこ来んな」

「気付いたらここに居たんだもん、しょうがない……じゃん……」

消えてしまいそうな声。整った顔立ちが台無しになるほど、赤くなった目元。まるでウサギのようだと、隼人は思った。

そんな彼女を、愛おしいと感じてしまう隼人の感情は、随分前から、もう後戻りできない所まで来ていた。

「それで、フラレタ理由は？」

沸騰したミルクを丁寧にカップに注ぎながら、隼人は今の状況を少しだけ楽しんでいる自分を感じた。

「君の好きな人は僕じゃない」

「は？」

「そう言われたの、彼氏……じゃなく元カレに」

「ふーん」

隼人の作った特性のホットミルクがテーブルの上に置かれる。陽菜はベッドからゆっくりと降り、カップへと手を伸ばした。この隼人特製のホットミルクを陽菜が飲むのは一体、何日目だろうか。泣き疲れた陽菜の身体に程良い甘さが伝わっていく。

「美味しい」

「で、結局、誰が好きなんだよ」

隼人は長めの前髪をかきわけ、陽菜に視線を合わせた。陽菜は改めて隼人を見つめた。相変わらず整った顔立ちの隼人だが、今日は普段よりも妖艶に感じられる。そんな隼人のいつもとは違った表情が、陽菜の鼓動を速まらせていた。

「誰って……。わかんない」

「……つたく、そんなんだから振られるんだよ」

彼のついた3度目のため息は、諦めと、どうしようもない切ない感情がこもっていた。

うさぎ、うそ、うさぎ

「だって、元カレと付き合い始めたのもあっちが好きだって言うから、なんとなく私も好きなのかなあって思って付き合いただけで…

…。実際、好きなのは分からないって言うか……。今思うとただ寂しいだけだったのかなって……」

「じゃあ、別れて良かったんじゃないの？」

隼人は煙草に火を付け、白い煙を吐き出した。

「そのままダラダラと付き合ってもしょうがないだろ。焦んな。本当に好きな奴だけと付き合え」

どこか突き放すようで、それでいて優しい隼人の横顔は、本当に綺麗だった。陽菜はカップに残っているミルクを一気に飲み干し、愛らしい笑顔を見せた。

「ありがと……。なんか凄いですっきりした。そういえば隼人はどうして彼女作らないの？もしかして……。好きな人いる？」

隼人は煙草を灰皿に押し付け、速まる鼓動を何とか静めようと努めた。

「いるよ」

うさぎ、うそ、うさぎ

「そ、そうなんだ。えっ誰……？」

予想外の言葉だったのか、陽菜は少しだけ動揺した。

「お前の知らない奴だよ」

隼人はズキズキと痛む胸の痛みを気付かないふりをして目を閉じた。急に辺りには、耳が痛いくらいの沈黙が流れた。

「お前、何でまた泣いてんだよ」

隼人は泣き止んだはずのウサギが、また涙を流していることに驚いた。

「嫌だ」

「は？何が……」

「隼人が私以外の人に、ホットミルクを作ってあげるなんて絶対、嫌！」

泣いた跡の残る赤い目が、隼人の顔を捕らえる。陽菜は飲み干したカップを握り締め、大粒の涙を流した。

隼人は、陽菜の言葉の意図が読み取れず困惑した。

「何だよ、それ」

「隼人が他の人に優しくするの想像したら、なんかすっごいムカついたの！」

うさぎ、うそ、うさぎ

「お前、言ってる意味わかってんの？」

「分かんないよ。でもムカつく！　なんでか知らないけどムカつくの！」

隼人は目の前で、ありもしない空想の人間に、嫉妬をする陽菜を抱きしめたい衝動に駆られた。陽菜の嫉妬は、恋心からくるものなのか、それとも、ただの強い独占欲からくるものなのか……。彼は後戻りできない感情を持って余しながら、その整った顔で笑った。

「なあ、陽菜。俺の好きな奴に会いたい？」

「え？」

陽菜は予想外の隼人の言葉に、驚きを隠せなかった。

「俺の好きな奴気になるんだろ？　会わせてやるよ」

「ヤダ、会いたくない」

陽菜は子供のように肩を竦め、目を伏せた。

「いいから、目え開ける」

陽菜が恐る恐る目を開けると、そこには真っ赤に目を腫らした自分の姿が映っていた。

うさぎ、うそ、うさぎ

「会えた？」

「隼人、どういう意味……」

隼人は手に持っていた鏡をテーブルに置き、陽菜の手を引いた。そろそろこの気持ちに決着を付ける時が来たようだ。目の前で驚くウサギを、例え失うことになっても、自分の気持ちに嘘はつけないのだから。

二人の距離がゼロになる。

「俺の好きな奴はお前だよ」

目の前には裏切られたと言つような顔をしたウサギが一羽。零れだした感情は留まる事を知らない。一線を越えてしまえば楽になる。

さあ、今までの嘘を取り戻そうか。君が僕を見つめてくれるまで

広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4216a/>

うさぎ、うそ、うさぎ

2008年11月7日08時01分発行